

令和4年度糸島市協定大学等課題解決型研究事業 研究成果ダイジェスト版

研究事業名

新町弥生人の形質・文化・復顔に関する研究

研究者名

舟橋京子（准教授／九州大学比較社会文化研究院 ・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）

研究協力者名

川久保善智（助教／佐賀大学医学部医学科生体構造機能学講座）

米元史織（助教／九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）

研究期間

2022年7月27日－2023年3月31日

研究計画の内容

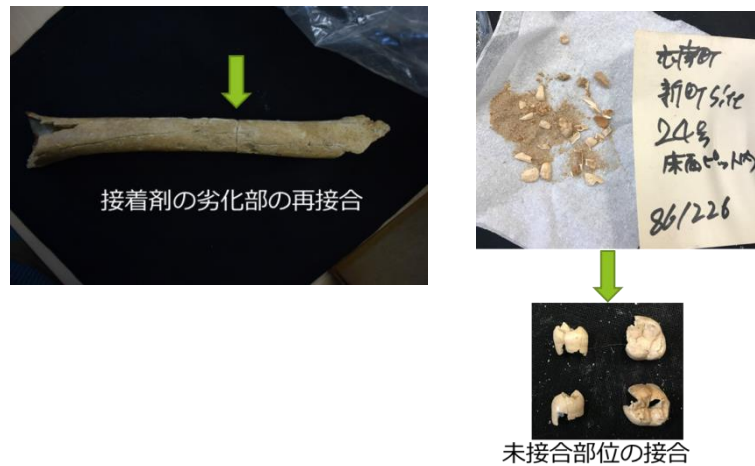
新町支石墓群は大正時代に九州大学医学部教授であった中山平次郎氏によって考古学界に紹介され広く知られるようになった。1986年には初めての本格的な発掘調査が行われ、弥生時代早期の支石墓と人骨が出土したことで注目を集めた。大陸や朝鮮半島との交流の証となる支石墓が発見され、同時に人骨が良好な状態で出土したことから日本列島における弥生時代のはじまりを知る上で重要な手がかりとなる遺跡と評価され、平成12年には国の史跡に指定された。

この新町支石墓群の発掘調査成果については報告書（志摩町教育委員会『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書第7集、1987年）が刊行されている。同書の中では遺構や出土遺物の報告に加え、出土人骨の計測や分析結果についても触れられており、新町弥生人の形質やルーツ・文化を考える上での基礎資料となっている。ただし、人骨形態および人骨から観察可能な儀礼・習俗に関しては発掘調査時の見解のままで詳細な検討が行われていない。したがって、人骨そのものの再整理・観察・計測およびデータの分析と、それらを基礎とした最新研究が待たれる状況にある。

くわえて、現在糸島市によって進められている新町支石墓群の整備にあたっては人骨の再調査と最新の研究を実施し、糸島市の史跡整備事業に参画し展示品や解説パネル等はその内容を反映させることで、その研究成果を市民をはじめとする来場者へ還元したいと考えている。また、出土人骨に肉付けした「復顔」を作成することで、整備のテーマである「顔の見える展示」を実現し、新町支石墓群のシンボルとして遺跡のPRやひいては糸島市全体のPR活動に活用できるようにして行きたいと考えている。

研究成果

① 出土人骨の再整理：新町遺跡出土人骨の整理・接合・個体情報の確認（主担当：舟橋）



報告当時1987年にクリーニング・復元された人骨を再整理・再接合を行い、年齢・性別個体数の確認を行った（図1）。

図1 再整理・再接合を行った個体の一例

② 形質：新町遺跡出土人骨の頭蓋形態の再検討（主担当：米元）

遺跡報告の当初に縄文的であると評価され（志摩町教育委員会1986：1987）、後の研究成果において形質的特徴の検討で渡来的な要素が入っているとの指摘（中橋・永井1989、田中1991）が行われていた。

本研究事業に際し、米元が北部九州の弥生遺跡出土人骨及び縄文後期遺跡出土人骨

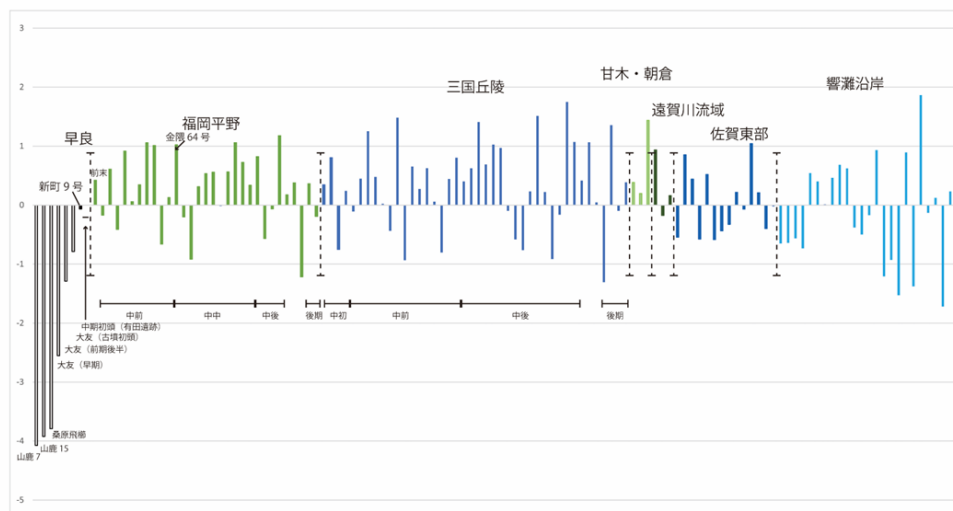


図2 個体別主成分得点グラフ（米元2023より引用）

と新町遺跡9号人骨の個体の形態的特徴の評価を行った。その結果、新町遺跡に関しては、在来的（＝縄文的）な特徴と渡来的な特徴を併せ持った個体であるという評価に至った（図2 米元史織 「北部九州の弥生人達：いわゆる渡来系形質について」『九州大学総合研究博物館研究報告』20, 49 - 73頁）。

③ 文化：風習的抜歯に関する検討および葬送行為に関する検討（主担当：舟橋）

i) 抜歯風習 新町遺跡出土人骨の抜歯風習に関しては報告時点においては5体の抜歯風習が報告されていた。再検討の結果9号に関しては臼歯部を含む多くの歯が生前歯牙喪失のため、風習的抜歯を同定することが困難であるということが確認できた。その他の4体に関しては、風習的抜歯の同定を行うことが可能であった（図3）。

これらの性別は下顎の切歯を複数抜歯するタイプが女性である15号、16号に見られ、下顎を抜歯しないもしくは1本のみ抜歯するタイプが男性である19号・24号に見られる。したがって、抜歯型式のみでなく抜歯型式の背後にある社会的区分自体も縄文時代晩期のそれを継承したものであると言える。ただし、北部九州弥生時代において



図3 個別抜歯状況（舟橋 2023年3月22日 糸島市 博物館講座『伊都学 第4回「出土人骨からみた新町弥生時代人の世界」』 発表資料より）

ては、このような縄文晩期的な抜歯風習の存続が通例であり、新町遺跡も同様であることが確認できた。

ii) 葬送行為 人骨の再整理の過程で、未報告の人骨の存在が明らかになった（図4）。21号墓に伴うと推定される四肢骨片である。人骨に付されていたラベルによると、「21号墓東南隅 棺外」とあり、21号墓の墓構内もしくは墓壇肩口付近出土と判

断できる。報告の際には、遺構・人骨の所見で言及されていないものの、遺構が3基（56、57、21号墓）近接して、時間差をもって営まれた際、後続する墓（56号墓ないしは57号墓が）先行する墓（21号墓）を破壊した際に、埋葬されていた骨化した遺体を片付けたものと推定される。



④ **復顔**：新町遺跡9号墓出土人骨の復顔を行った（主担当：川久保）。

復顔に関しては、まず初めに、米元および米元の指導下で雇用した学生が、新町9号および比較頭蓋骨の3Dデータを採取、精巧な模型を作成した。



図4 新たに確認された新町遺跡21号墓に伴うと考えられる人骨

これらの精巧な模型及び、新町遺跡9号人骨の実物の比較観察および顔面部の計測に基づき、川久保が復顔の基礎データの採取を行った。加えて、川久保・米元・舟橋の三者で新町9号人骨の顔面形態の特徴に関する確認を行い復顔像に関する協議を行った（図5）。その後、新町9号の模型は佐賀大学医学部に送付され、復顔作業の第一段階である、ランドマークの作成が行われている。



図5 新町9号の顔面形態に関する協議

(2023年3月9日 九州大学総合研究博物館にて 左：川久保、右：米元)